

# 道南の自然——厚沢部

一戸 静雄

いちのへ・しずお  
1936年エトロフ島ルベツ  
生れ。  
1960年学芸大学函館分校  
卒。  
自然観察指導員。現在函  
館市立本通小学校教員

春、野鳥のさえずりがにぎやかになり、ヒバ林のまわりの樹々が萌黄色に変わってきます。ヒバ林の濃い緑と、鮮やかな対比をなして、ブナ林では黄緑色の葉を伸ばします。広がりはじめた新葉の細かい白毛が、陽光をあびて輝いています。

ここは、厚沢部のブナ林です。

八千五百年前、青森にまで到達したブナは六千年前、北海道に上陸し、四千五百年かけて北桧山まで北上してきました。ブナは津軽海峡をどのようにして渡ったのでしょうか。

厚沢部に生育するブナは澄んだ空気の中で、白っぽい苔や黒っぽい苔をまとい、よりブナらしい模様の樹肌を見せてくれます。

銀の糸のような細かい雨が、ブナの森に降り注ぎます。雨の日のブナの樹は、そのしずくを葉から枝、枝から幹へと集め、着生した苔の表面をぬらしながら、幹を優しくなでるように流れ落ち、そのまま根元へ吸い込まれていきます。樹幹流の多さに比べて、根元のまわりの土が、あまりぬれていないのが不思議です。地下深く根を張るブナの性質と関係があるのでしょうか。雨の日にブナの幹をみがくように流れる水流を見ていると、ブナの歎びの歌が聞こえて

くるようです。

ブナの森にかこまれるようにヒノキアスナロの森があります。十一月も末の冷たい季節風の中でも、一步ヒノキアスナロの森に入ると、はたと風は止み、三〇メートルもの高さの樹上をごうごうと吹き過ぎていきます。



冬のヒバ林の観察会（1月）

夏でも、林内に入るとヒンヤリとしています。ヒノキアスナロはどんな樹木なのでしょう。

道南の植物分布の特徴のひとつに、北方系と南方系の植物が濃厚に混在していることがあげられます。その北限種の樹木としてヒノキアスナロ（アスナロの変種、ヒバ。）があります。

ヒノキアスナロは、道南でも特に限られた地域に分布しています。

アスナロの古名は「阿須松」と記され、今でもアスヒ、ヒバ、アテと呼ぶ地方があります。「アテ」とは、古代語で「貴い」「上品なこと」、「気品のあること」という意であり、「気品の高い」ということとなります。そうすると、「明日は松になろう」という意味が一八〇度ひっくり返って、「松よりも気品の高いヒノキアスナロ」となります。

こんな素晴らしいヒノキアスナロの森が北海道南部の厚沢部にはあるのです。貴重な北限種です。

厚沢部町土橋自然観察教育林にあるヒノキアスナロの森を観察すると、ブナ林にかこまれています。生育している場所は、山の斜面の部分が多く、それも斜度が三〇度以上もある急斜面で樹木が育つには条件が良いとは言えない場所に、純林を形成してい

ます。ヒノキ科の常緑高木ですから、一年中林内は、うす暗く、特に永久自然観察林としてヒノキアスナロの森の遷移を観察している場所では林床の植物もまばらです。樹冠が九八%以上も日光を受けとめてしまうために、林床に差し込む日光が極端に少ないからです。

発芽して二〇年を経たヒノキアスナロでも未だ横へ枝を伸ばして幼年期の樹形です。すつきりとした傘形の樹形になるには、はやくとも五〇年近くかかり、三〇〇年経っても胸高直径五〇センチメートル程しか成長しないという超のんびりな、大器晩成型の樹木ですが、その価値は、高く評価されています。建築材として利用され、数百年経過して、表面がぼろぼろになっても内部は変化しないのです。最近では防腐効果や香り成分の分析、抽出が進み、様々な用途に利用されています。

土橋自然観察教育林は、江戸時代幕府の支配下で松前藩が管理していました。元禄のころ大山火事が発生し、この森林が焼失したという記録があります。その後、大切に維持管理、保護されてきた約百ヘクタールが現在の自然観察教育林になっているのです。

道南の限られた地域に分布しているヒノキアスナロの森は、もつと大切に保護されるべき樹種ではないかと思うのですが、伐採により、次第に減少しているようです。

厚沢部の春は、ブナ林とヒバ林だけではありません。太鼓山に連なる上蛾虫沢には、ハンノキ、ヤチダモ、ハルニレ、サワグルミなどの林があり、その林床には水分をたっぷり含んだ湿地が広がっています。そこにはミズバショウの白、エゾノリュウキンカの輝く黄金色が一面に広がり、カタクリの紅紫色、

エゾエンゴサクの青い色がふちどりをしています。ここを訪れた人は皆、夢の世界に迷い込んだような心地になってしまっています。

秋、土橋自然観察林に匹敵する紅葉の厚沢部太鼓山を歩きます。紅や黄色の美しいモザイク模様が全山を彩っています。ヤマモミジの紅、真紅のアカシデの葉、イタヤカエデ、ブナの黄葉……。それは自然が人間に与えてくれる歓びです。濃い緑はヒノキアスナロの色です。昔、炭焼きをした跡が凹地となって残っています。



1993.12.12 自然観察教育林での観察会風景

高橋武夫氏はこの厚沢部の森林を、毎月一回の森林観察会を通し、森の中を歩きながら、人間と自然や豊かな森林のみかたなどの自然観を語ってくれます。もう六十七回になります。

厚沢部町館の子ども達にとって忘れられない思い出があります。

真冬の二月、毎日遠くに見ている「ニッ山」に登ったことです。親達も一緒です。七〇人程が、腰まで埋まる深雪の中、かんじきをはいて一步一步踏み、長い列を作って登ります。太いブナの樹間をカラ類やコゲラなどが飛び回っています。粉雪が陽を受けて山の斜面一面に輝いています。

汗をかいて頂上に立った時、子ども達が大喜びしたのはもちろんですが、それ以上に親達感動したのです。いつも見なれている我がまの姿が見下ろせたのです。今までここに登った経験など、だれひとりとしてなかったのです。

このような企画は「厚沢部の自然を観る会」が中心となって動き、実現したものです。

この子ども達が大人になったとき、故郷の姿は冬の山の厳しさ優しさと重なって、なつかしく浮かんでくることでしょう。

「厚沢部の自然を観る会」はこの他にも、二〇〇二年の間に、八木健三氏、小野有五氏、俵浩三氏、鮫島淳一郎氏、佐藤謙氏など専門家を招いて講演会や観察会を実施しているのです。高い専門性と深い教養を持った人々が、厚沢部の自然の豊かさを教えてくれたのです。

このような企画を実現させる原動力はどこにあるのでしょうか。

最初に述べた自然観察会の主宰者高橋武夫氏やこれから述べる林吉彦氏などを中心に地域で活動している人々が陰で支えていたからに他なりません。

このまちは何もなないまちだと話していた町民が、徐々に影響され、我がまの良さが豊かな自然環境であることを意識してきました。

厚沢部の森林には、天然記念物のクマガラをはじめ、多種類の野鳥、猛きん類まで営巣します。この

ことは野鳥の生息に適した豊かで深い森林のあることを意味しています。山があり、谷があり、そこに連なる川があり、多様な生物が生きて、ひとつの生態系ができ上がっています。それは今年に入ってから十三頭のヒグマが捕獲されていることから分かります。大自然の中で生きる動物にとって恵まれた環境と言えるでしょう。

渡り鳥の調査をしている人々の中に標識放鳥をしているグループがあります。その有資格者は全道でも四〇人あまり、道南ではまだひとつたの人数です。この人々の地味な努力で道南を渡りのコースにしている野鳥について新しい発見がありました。

そのひとつは八月の暑い最中に南へ渡る野鳥がいたという事実です。ムシクイの仲間です。それは偶然のできごとからでした。

お盆休みで帰省した鳥類標識調査員の林吉彦氏は墓参の帰途、白神岬で群れている野鳥を発見し、調査活動をはじめたところ、網にかかったのは、エゾムシクイ、センダイムシクイの一群でした。それまでは真夏に津軽海峡を渡る野鳥がいることを考えた人がいたとしても、だれも確認はしていませんでした。八月に渡りをするムシクイ類のいたことは大発見でした。

林氏のバンデングフィールドは、厚沢部の富里です。

春から夏に道東や大雪山で生活しているノゴマは、秋になると集団を作り南下してきます。そして富里は、ノゴマの集団が南下する際、通過滞在地のひとつであることが、林氏によって確かめられました。

秋のある時期になると一日に数百羽ものノゴマの群が富里を通過していきます。このようなノゴマの渡りのコースの確認は今まで知られていなかったこ

となので、道南、特に松山地方の重要性がこれまで以上にクローズアップされることになりました。

渡り鳥のコースは遺伝子にインプリントされているといわれます。そうすると体力と飛行距離から滞在地域も毎年同一地域になりそうです。渡りのコース途中にある森林が開発により破壊されたり、湿地や草原が埋め立てや造成などで破壊されたら、渡りをする鳥類は休憩や採餌が十分できなくなりそうです。

厚沢部の森林がどんなに豊かでも、鳥類にとってはそれだけでは困るのです。つまり鳥類の移動するコースに沿ってどこまでも自然が残されていなければ、渡り鳥も減少の一途をたどることになるでしょう。

厚沢部の森林とそこに住む動物や鳥類が多様性を失うことなく、豊かな大自然をいつまでも維持し継続できるように大切にしていきたいものです。

#### 参考文献

中村 浩著「植物名の由来」東京書籍  
宗像英雄著「道南地域の植生」



土橋自然観察教育林内の  
ブナの大木